

(様式 2)

「(仮称) 桐生市人口ビジョン原案の骨子」に対する意見提出手続の結果 (意見要旨)

- 1 意見の募集期間 平成 27 年 9 月 16 日 (水) ～10 月 2 日 (金)
- 2 意見の提出者数 5 人 (直接 2 人、電子メール 3 人)
- 3 意見の件数 7 件

(1) (仮称) 桐生市人口ビジョン原案の骨子全般についての意見

番号	意見の要旨
1	「桐生市人口ビジョン」は、桐生市の実情が遺憾なく盛り込まれている。グローバル化の大きな波が雇用を奪い、「桐生市人口ビジョン」に大きな影を落としている。高齢化は社会水準の高度化の影響が大きい、自然の成り行きであるとして見落としてほしくない。

(2) (仮称) 桐生市人口ビジョン原案の骨子「5:目指すべき将来の方向」についての意見

番号	意見の要旨
2	桐生市は前橋市や高崎市と同じになる必要はないと考える。一見したところ、前橋市や高崎市の方が人口が多く栄えているような感じですが、そもそも桐生市が目指すべきは前橋や高崎ではなく「究極の桐生市」だと思われる。つまり、桐生がより桐生らしく、魅力的になる方向で努力すべきで他の市のように、という方向は良くないと思う。
3	「まちなかの魅力向上」も「究極の桐生らしさ」が必要で、もし、単に大型ショッピングモールを立てるだけだったら、他の市と一緒に魅力的ではない。織物、きもの、服飾に特化した商店街がプラス必要だと感じる。「誰もが住みたいと思えるまち」は良い事ではあるが、桐生市は桐生市としての「強烈な個性」をまず持つようにした方が、全国的に注目は集まる。「誰からも気に入られる」方向で考えていくと、個性のないまちになる。少し誰かには受け入れられなくても、気に入った人がとことん好きになるような「強烈な個性を持った、魅力的なまち」にする方が良いと思う。
4	学生の進学先、就職先の受け皿になるような市にするよりも、桐生市は「織物産業」に特化していく方向に向かっていったらどうかと考える。桐生市の学生が流出していくよりも、「桐生市に魅力的な就職先がある」と、他の市や県からそれ以上の多数の人が桐生に就職に来るようにするよう促すようにしていけば良いのではと考える。「織物、きものや服飾といえば桐生」というぐらいに、織物工業や服飾デザイン、服飾の販売においての北関東の中心地となるように桐生市を方向づけしていくようにして「個性」を打ち出していくのはどうか。 また、桐生織が専門的に学べる学校があると良いのではないかとと思われる。桐生織以外にも、服飾デザインの学校を桐生市に誘致してはどうかと考える。デザインの学校でも、特に「和のデザイン」に特化した学校を新たに作ると、東京のデザイン学校とはまた一線を画した特徴ある「デザインの学びのまち」になるかもしれないと思う。 「企業誘致」とあるが、これも織物業やきもの、服飾に特化して誘致していった方が良いと考える。

5	桐生市はみどり市と早く合併して大手企業誘致をしてほしい。鳥取市にスターバックスが出来てあれだけの集客力がありました。桐生にはスターバックスや王将など若者が行きたいお店がありません。ザスパ草津やダイヤモンドペガサスが群馬に有るので桐生でも開催して欲しい。プロ野球の二軍も呼んで毎月開催して欲しい。野外ステージも全然いかされてない。吉本など呼んで有効活用して下さい。昔の活気が有った桐生市にしてほしい。
---	--

(3) (仮称) 桐生市人口ビジョン原案の骨子「6:人口の将来展望」についての意見

番号	意見の要旨
6	少なくとも亀山新市政4年間で、ある程度の目標（＝流動人口も含め人口を最低5%増）を達成してもらいたい。そのため、行政、市議会、有識者委員会は、正に不退転の決意で取り組み、施策を実行してもらいたい。
7	『7万人でも楽しく幸せに暮らせる桐生』 人口減少、少子高齢化、産業停滞は地方都市共通の宿命ですが、例えば2040年の桐生市は78,000人程の人口となります。我々は、RESAS"稼ぐカ"ぐんままちづくりビジョン桐生市アクションプラン、桐生市統計資料などを元に、他都市との比較を交えて桐生市の現状を読み解き、目標を『7万人でも楽しく幸せに暮らせる桐生』としました。 私たちは、人口減少、少子高齢化、産業停滞を覚悟し『本当の豊かさ』を真剣に考え、みんなの共通認識とすることが必要です。 コンパクトシティ、低炭素生活、クラスター都市、カーボンニュートラルな暮らし、ライフスタイルを変える、など言い方は色々ですが、つまりそれは『本当の豊かさ』を知り『心持ちを変える』ことなのです。少し先の『不都合な未来』を認識し、お金が掛からない"こころ豊かな生活"を、皆さんと考える事が、まずは第1歩だと考えます。 『こころ豊かな生活』ができる桐生 戦後の困窮時代、食料さえなかった時代、貧しくとも『心は満たされていた』と聞きます。庭で野菜を作り、味噌醤油をお隣さんから借り、朝晩挨拶をし、鍵も掛けず、窓越しに隣家の喧騒が聞こえる、その隣組感覚の本質・核心を取り入れた“2040年の隣組”が今、必要だと思います。つまりお金に換算できない価値“プライスレス”を自覚すること、それが『こころ豊かな生活』です。 給与はそこそこですが、自然と親しみ、人と親しみ、文化歴史を肌で感じながら、“本物と接しながら”生活する、都会では到底望めない『こころ豊かな生活』を桐生で謳歌しようではありませんか。

(様式 2)

「(仮称)桐生市まち・ひと・しごと創生総合戦略原案の骨子」に対する意見提出手続
の結果 (意見要旨)

- 1 意見の募集期間 平成 27 年 9 月 16 日 (水) ～10 月 2 日 (金)
- 2 意見の提出者数 7 人 (直接 2 人、ファクシミリ 1 人、電子メール 4 人)
- 3 意見の件数 42 件

(1) (仮称) 桐生市まち・ひと・しごと創生総合戦略原案の骨子全般についての意見

番号	意見の要旨
1	歴史、自然、文化は大事だが、それだけでは人は集まらない。新しい魅力がなければ人は興味を持たない。桐生市外に転出する人の多くは「桐生にいては夢が叶わない」と考えているからだと思う。「桐生にいれば夢が叶う」それを意識して様々な施策を推進して欲しいと思う。
2	行財政改革の断行 少子化のためには、暮らし易く、産み易い町、そして高齢化に先取りの対応する町として未来を切り開くために、財源が必要である。市財政にあっては、当然ながら無駄やムラを省き、「入るを増やし、出るを削る」の基本を徹底してもらいたい。正に口先だけでない行財政改革の断行、そしてそれによる余剰財源の増加を図り、それを先ずは教育と福祉 (医療) に回す。 とにかく、1 にも 2 にも財源、社会資本の確保から始めなければ、全てが絵に描いた餅で終わる。
3	地域住民生活等緊急支援のための交付金 (2014 年度補正予算) として地方創生先行型として 1,700 億円を組込み、その内基礎交付は 1,400 億円であり 1,741 の市区町村のほぼ全ての自治体に交付することになっている。この交付金は一過性のものに使われたくない。
4	地域が活きるモデルとして増田寛也著「地方消滅」では若年女性が増えた地方都市を分析して、産業誘致型、ベッドタウン型、学園都市型、コンパクトシティ型、公共財主導型、産業開発型の 6 つのモデルに分けた。それぞれが、桐生市の再生にとって参考にすべき対策である。 その中で、特に重要視しているのが最後の産業開発型であり、例として、秋田県大潟村の大型化した農業、メガネフレーム作り日本一の福井県鯖江市、観光の北海道ニセコ町、木質バイオマス発電の研究・人材育成で有名となった岡山県真庭市を上げている。このような事例を参考にするとともに、桐生市の実態を分析して、実施すべき対策を決め、それを実行するとともに、PDCA を廻して進めて行かなければならないが、「桐生市再生検討チーム」を結成し、しっかりしたマネジメントの下に実行する必要があると考える。
5	【計画を確実に実施する為のシステム作り】 以下に述べる政策を進めるには、行政内にプロジェクト推進部門など庁内の横断的ネットワークが必要です。 a) 経営感覚を行政運営に取り入れます 損益計算・収支感覚と検証 1 プロジェクトの収支を評価基準の上位に置く株式会社のセンスが必須 b) PDCA サイクルを確実に廻します

	特に調査/分析/評価が重要です。これを丁寧に繰り返す事で、改善する方向が見えてきます。外部の専門家による評価や実施案策定のプロセスが必要です。 c) 推進のための組織改善・意識改革必須です 市民が変われば>>頭が変わる>>職員が変わる>>まちが変わると認識しましょう。必要な人材は、集める・育てる・使う d) CRO(chief relationship officer:最高連携責任者)の設置と、地域の人財をつなぐ人的基盤及び情報プラットフォームの構築をします e) データ解析 統計データ、BigData、OpenData の利活用が必須の時代です。Data 収集、分析、考察、立案、実施、評価、あらゆる部門でこのサイクルを支える BigData、OpenData の利活用時代が始まっています。 利用可能の解析システム 【例】Microsoft Azure Google BigQuery 上記の仕組み作りを基礎として『7万人でも楽しく幸せに暮らせる桐生』の為に、(1)～(5)の重点プロジェクトをPDCAサイクルの中で推進する。 (1)教育環境と文化歴史の踏襲 (2)自然環境重要性和利活用方法 (3)ローカル型産業の推進 (4)医療介護の推進 (5)社会資本の充実 (1).教育環境と文化歴史の踏襲 教育文化施設を活用したまちづくりに向けて、これからのまちづくりは、地域の課題を補いながら他にない地域の強みを見出してまちの特性を活かしたまちづくりが求められています。そこで桐生市における課題と強みを整理します。 a) 桐生市の課題 ①人口減少による高齢化と少子化（特に中心市街地が顕著） ②可住地面積が少ない ③公共施設の過大と老朽化 ④中心市街地におけるインフラの不便性と老朽化 ⑤産業構造の変化による雇用の減少 ⑥人口減少と高齢化による税収減少と行政コストの増加 b) 桐生市の強み ①中心市街地におけるインフラの充足 ②自然環境 ③歴史と文化のある都市形成 ④地場産業の継承 ⑤地域産業の多様化 ⑥コミュニティの充実
--	--

	⑦公共施設が多い c)現状把握 桐生市の現状は「ぐんま“まちづくり”ビジョン桐生市アクションプログラム」にまとめられています。そこでその中不在桐生市における公共施設の現状について現状把握する必要があります。 桐生市には多くの公共施設があります。学校、幼稚園、保育所、公民館、図書館、文化ホール。インフラである下水道、道路も公共施設です。桐生市民はこれまで質が高い多くの公共施設やインフラを造り市民が享受してきました。 しかし、これからこれらを維持運営していくためにはたくさんの費用が必要となり、これはすべて税金で賄われます。財政難となっている現在、市民にとっては大きな負担となっています。そして今後の高齢化と少子化によりその負担は将来の市民である子どもたちへ負わせることとなります。 将来計画の策定に当たり、公共施設の再配置による施設の取捨選択は地域の財産を活かしながら新たな都市機能を備えてゆくために必要です。そのために現状を調査する必要があります。 d)教育文化施設を活用したまちづくりビジョン e)公立高等学校再編成による教育環境の充実と関連産業の活性化 f) (桐生みどり地区公立高等学校再編計画) g) まちなか文化施設による人材育成と魅力ある居住環境の構築 h) (大川美術館とあそまなぶものづくり学校) i) 重要伝統的建造物群保存地区キャンパス化構想(歴史的町並みにおける居住環境整備と大学キャンパス化計画) (2). 自然環境重要性和活用方法 ・ 里山資本主義 著者:藻谷浩介【参考: 富山和彦著『なぜローカル経済から日本は甦るのか』】 ・ カーボンニュートラルな町 ・ 過疎を武器にしたまちづくり ・ JST 低炭素生活 (3). ローカル型産業の推進 a)ローカル型産業を育てて 450 万の年収を確保します 産業を世界相手のグローバル型産業(G 型産業)と地域循環型のローカル型産業(L 型産業)に分けると、桐生ではローカル型産業が収益の 70%を占め、その業種は医療介護業、学校教育業、飲食料小売業、その他小売業です。これを育てることが生き残りに必須条件となります。給与では東京が年収 550 万、群馬 400 万ですが、これを 450 万に UP する政策が現実的です。其のためには基盤産業の成長が必要となります。 【参考: 富山和彦著『なぜローカル経済から日本は甦るのか』】 b)桐生の繊維業はグローバル型産業の優等生です 因みに桐生のグローバル型産業は『輸送用機器器具製造業』と『繊維業』で、繊維業はパフォーマンスがよく、従業員は少なくとも利益率は高い優良産業です。最大の課題は『売れるもの作り』を担う、起業家やクリエイターの人材育成でその施策は以下の通り。
--	---

	・廃校舎や街中空き店舗をリノベして職人、技術者、アーティストの工房作り ・伝統産業や先端技術の職人、技術者の育成教育システム ・職人見習いの人達の就職先づくり(働き口) ・衣食住遊休学健の整備（安い住居、食、豊かな自然、学ぶ仲間や師匠、交流場所） ・ICTの有効活用 ・若い起業家の育成 c)高付加価値産業としての林業+建設業 ・木炭ストーブ、木チップ、販売会社、研究開発群大等 ・桐生市の7割が森林という"地の利"を生かすことが肝心 ・木を生かす職人の育成は林業と建設業のコラボです ・雇用力、収益力のある基盤産業ではありませんが、生活を支える大事な産業ですので、健全な存続が必要です。 (4).介護医療の推進 ・健康寿命の続伸 死ぬまで元気ピンピンコロリ>>医療介護費用の削減 医療介護費は60兆円で毎年1兆円増加しています。国は削減の為"自宅で終末を迎える"政策を取り始め、地域包括センターを設置し展開していますが、市民には金銭的、肉体的、精神的な負担が掛かり初めています。 死ぬまで健康が幸せですが、"健康寿命"と"平均寿命"の差が10年程あり、この差を詰める事が医療介護費の削減でもあり、人の幸せでもあります。『死ぬまで元気でピンピンコロリ』が目標ですが、若い時からの自分管理と健康的な生活を送る事が大切です。スポーツ、介護、医療、医歯薬が協働すれば、医療介護費を削減する事が可能となります。それを進めるその為にも、地域の相互扶助の仕組み“隣組”が必要です。 ・シングルマザー、女性の介護事業参入 >>医療介護職員の増加、ローカル型産業の振興 子育てで女性やシングルマザーが働ける環境作りを行い、医療介護の就業を促す為 ・自宅で死水を取る、町内で看取る >>新しい隣組の仕組み ・住んで楽しい町、まちの人がみんな知り合い、家族みたいに、 ・宮崎駿氏は石垣島で始める“子供の村”事業に3億寄付しています。 (5).社会資本の充実 ー交通網の充実 各地の拠点をつなぐ交通網は必要 自律分散協調型ネットワーク ー社会資本の価値を高める(高付加価値化) 森林、川の産業化、観光化、ICT、有効利用方法 ーICTの利活用 無料Wifi網の設置(町中WifiでData収集、傾向把握等) デジタルアーカイブ構築、利活用、収益化
--	---

	BigData.OpenData の利活用>>分析、開発、その他 ー防災体制の充実 安心安全な町、防災意識、群大、
--	--

(2) (仮称) 桐生市まち・ひと・しごと創生総合戦略「目標 1」についての意見

番号	意見の要旨
6	群馬大学の研究内容から事業化の可能性のあるものを抽出する作業を行うチームの結成を提案したい。それを行うには、事業化の可能性を企業人の目線で判断する人材（大手企業で商品開発から事業化を経験した技術者 OB が適任）の確保が必要である。新しいシーズを持った大学は群馬大学に限らず外部で探してタイアップしても良い。 新たに起業を考える人材を探し、創業を支援する取組も必要。この取組は、若者を桐生市に呼ぶ良い機会にもなるので、「創業を桐生市で」、というキャンペーンなども面白いのではないかな。起業する人を助ける環境（例えば、銀行が起業化を助けるために、実績のない人材に投資したり、市が事務所を無償で貸す）作りに取り組む必要がある。 また、第 2 創業的な事業は桐生市に多く存在しているので、その後を継ぐ特徴のある企業を探し、援助して行く仕組みを構築する必要がある。既に、桐生市の産学推進室や繊維工業試験場にデータはあると思うので、起業化支援チームを結成して、今あるデータ整理と共に、新たな企業を探すため企業訪問などを始めることを提案したい。
7	地場産業の活性化のために 3 つの取組が考えられる。 ①顕在化した強い企業をより強くする取組 国内外の企業とのマッチング機会の提供、群馬大学との共同研究、卒業生の斡旋による人材供給などの支援が考えられる。このような機能は市の中に置かず、「桐生市再生検討委員会」を新たに結成して行う事を提案したい。新たな事業を提案する組織であるので、人選にあたっては有為な若者をその任に当てるべきである。また、桐生市には織物を中心とした多くの地域の産物がある。桐生市のホームページを利用してこうした地域の産物を国際的に紹介できるような取組も必要だと考える。 ②潜在的な良い企業を掘り起こし、強い企業に育てる取組 目利きの出来るコーディネータが多くの企業を廻って、隠れている技術や商品を探す取組が必要である。桐生市再生検討チームの中に、目利きの出来るコーディネータを配置して、その任に当たらせると良い。 ③弱い企業を救う取組 高齢化する事業者にとって事業売却や廃業は非常に重要な問題であり、事業を引き継ぐ若者を外部から招くような取組も考えられる。 この桐生市再生検討委員会を市が中心となって全体を統括し、PDCA のサイクルを廻してマネジメントして行くことを期待したい。
8	山梨県のぶどうは日本を代表するブランドに育っているが、そもそも絹織物の原材料となる繭を育てるための桑畑の特徴である、水はけと日照時間の多さによると言う。1930 年に甲府盆

	地の果樹の栽培面積は桑畑の 27 分の 1 だったが、養繭の衰退で 1976 年に果樹の栽培面積が桑畑を上回ったという。 このような条件は桐生市に広がる畑にも言えることであり、果樹栽培への転換も一つの方向と考えられ、桑畑の再活用をテーマに農業の将来を考える取組を始めることを提案したい。 林業は、桐生市における高齢者の雇用創出などの観点からも重要である。また、地球温暖化対策として、バイオマス発電は重要性を増すと考えられるので、林業とセットで産業として育てて行く必要があると考える。 なお、群馬は畜産県でもあり、畜産から出る糞尿は発酵によって良い農業資材にもなる。このような事業も新産業としての可能性があるので検討に値すると考える。 農林業についても検討委員会を作り活動することを提案したい。
9	群馬県における企業誘致は、高崎市を中心に多くの企業を誘致して実績を上げているが、残念ながら桐生市は低調である。 企業誘致に関しては、桐生市が持つ他に無い特徴（自然環境、教育環境、企業集積、世代別人口統計など）を分析し、対象となる誘致企業イメージを明確化して取り組む必要がある。合わせて、企業誘致は桐生市産業の発展が目的であるから、広域的に太田市や足利市等と連携して、他市が誘致する企業と桐生市の中小企業とのマッチングなどを行うことも必要である。
10	人材の育成については、現在企業で働く人と、企業に新たな人材を供給するための学生への教育が考えられる。例えば、これから桐生に企業を誘致する場合等、高校や大学から企業にインターンシップで仕事の経験をさせるような仕組みを考える必要がある。 なお、中小企業の課題として、経営者の能力に大きく依存するので、地域内外の開業者との情報交換が出来る環境を作り、経営者（特に若手）の育成に努める必要がある。中小企業大学校が行っている「若手経営者塾」への派遣を市がバックアップすることを提案したい。
11	桐生市の現状を考えると、医療用・介護用機器に転用できるゲーム機（アプリ）・システムの開発が、高齢者と若い世代双方にメリットのある事業だと考える。脳の信号を利用して機械を操作するブレイン・マシン・インターフェイス（BMI）という分野の研究がある。これにより義手や車椅子を自らの脳波によって操作することが可能である。また、動けない苦悩、痛みの緩和、ターミナルケアをどう考えどう対処するかという問題に、ヴァーチャルリアリティ（VR）技術を用いた「疑似体験による生活の質」の向上も、高齢者と若い世代の双方にメリットのある分野だと思う。 桐生には群馬大学理工学部がある。BMI や VR 技術の研究を働きかけて欲しい。そして群馬大学（理工学部・医学部）と連携した施策を進めて欲しい。群馬大学医学部とグループ研究できれば、新しい魅力ある新産業の創出・雇用の促進につながると感じる。商業高校のように高校生のうちから IT パスポートや基本情報技術者の資格取得を推し進め、ゲーム開発や医療機器開発の企業を市内に誘致して欲しい。
12	桐生市は「西の西陣、東の桐生」と言われた街なのだから「織物のまち」として、もっと全国区になるぐらいにブランディングするべきだと思う。「織物のまち」から少し広げて、桐生のまちを「織物、きもの、服飾のまち」とする事を目指したらどうか。 桐生商店街で「桐生織」に特化した店と品を揃えて「桐生市の文化」である「桐生織」を伝えていくようにしてはどうか。

	あまり有名な洋服などのお店が桐生の商店街にはない。桐生市街地に有名な服飾の店などをたくさん誘致して、商店街に有名店舗を入れて集客する。まず「人が来なければ」話にならないので、有名店舗で集客し、既存の店舗も見にくる人が増加する。既存店舗へ客が来て、購入につながれば売上増になる。 今は、「ネットショッピング」の時代で、特に若い人はネットショッピングが常識である。「桐生織のきものや帯が買えるネットショップ」を「楽天」や「アマゾン」にもどんどん出品させていくべきと考える。「桐生織」を全国区ぐらいに認知させていくために、有名なウェブデザイナーに依頼して、「桐生織」の魅力的なホームページ「桐生織ポータルサイト」を作って全国に発信させていけば、特に若い世代の心を掴むのではないかな。 これから「桐生織物」で生計を立てて生きたいと考える人にも分かりやすいようにする環境が必要と考える。「桐生織物 Cafe」と題して、桐生織物の職人になるにはどうしたらいいか、そのノウハウを教わる事のできるカフェスペースを運営していったらどうか。桐生商店街の一角に、桐生織らしい魅力的な空間でもてなして、桐生織物職人さんが常駐するカフェを作って、若い人を呼び込んでいくのはどうか。
13	桐生商店街は、4種の誘致に力を入れてはどうか。 ①織物工房兼店舗（ショップ） 桐生織の工房兼店舗を商店街に集約するとともに、全国の織物作家のメッカとなるぐらいに工房兼ショップを誘致して、数を激増させる。実現すれば「桐生といえば、あらゆる織物作品が見られるまち」と全国区で認知され、集客につながる。 ②全国のきものの店、洋服の店（有名店）、服飾雑貨の店 まず桐生織の店舗を集約する。それから、全国のきものの店、洋服の店、服飾雑貨の店、それらの有名店から小規模な店まで幅広く誘致して桐生商店街に集約する。実現すれば「桐生は北関東で最もきものや服が揃うまち」と認知される。 ③桐生市の地元市民の為の、ひととおりの店 「桐生市人口ビジョン原案後編」の60ページには、桐生市民が「大型ショッピングモールがない」事についてマイナスと考えているので、桐生商店街を半分、大型ショッピングモール化したら良いと考える。そこで桐生市民が欲しいと思うもの、あって欲しいと思う店が桐生商店街にも作られたら願望は叶う。 できれば、東京にはあるけれど群馬には無い店がたくさんあれば、群馬県民にとっても貴重な買い物スポットになる。「東京にあって、群馬に無い店」半分、「桐生にしか無い店」半分ぐらいになれば、全国から見ても価値が高まり、観光地化も望める。 ④桐生でしか食べられないものの飲食店 桐生に散らばっている「うどん」「ひもかわ」また「ソースカツ丼」のお店の支店としてたくさん桐生商店街に誘致したらどうか。観光客も「桐生商店街に行けば、早く桐生のものが食べられる」と認知され集客につながるだろうと思われる。 また、桐生商店街のショッピングモール化だが、桐生商店街ほど近くには「本一本二の重伝建」があるので、景観整備の点から言っても商店街の外観を「和風」で統一し、「重伝建」との調和が、なにより必要と考える。 もし、桐生がたくさんの人が来る観光地になったとしても、いわゆる「おみやげや」を作る

	よりは、桐生織物記念館の販売場のように、桐生織の小物など「桐生でしか買えないもの」の専門店を作るべきだと思う。また、桐生市商店街には、大型ショッピングモールのように、大規模な、そして駐車しやすい駐車場が必要だと思う。今ある商店街の建物を少し取り壊して減築しても整備すべきだと思う。
14	桐生に自生している「カッソウ」の栽培は、とても難しいものなのか。このカッソウをたくさん栽培して、全国に流通させてはどうか。
15	若い世代が、就農してみたいと思っても、「具体的にどうすれば農家になれるのか」という情報がないのではないかなと思うので、「就農の窓口」が必要かなと思われる。 単なる「窓口」ではなく、いかに農業が魅力的な職業かアピールする場、実際にどうやって農業を始めたか、農業を始めてからどのように上手く作物が作れるかすぐに分かる場である事が必要と思われる。「就農 Cafe」または「農業 Cafe」と題し、就農のノウハウに詳しい人、農作物の育て方に詳しい人、土地の幹旋ができる人、現役の農家さん、飲食物を作ったり運ぶウェ이터、ウェイトレスが常駐し、飲食をしながら、農業について何でも分かるような空間を作ったらどうか。 若い世代にもっと就農を促す方法として、「農業ポータルサイト」を作り、桐生市における就農のしかた、土地、農作物の育て方などがこのサイトの中の記事を読めばすぐ分かるといったようなホームページを「魅力的」に、ウェブデザイナーに作成してもらうようにしたらどうか。
16	桐生市はどの農作物に力を入れているのか、今現在どの作物が主流か、これからどの農作物に力を入れていきたいかという事を、全国に向けて明確にした上で発信していく事が必要なのではないか。 例えば「豚」ならば、全国に発信する事により、全国の豚農家を呼び込んで桐生市に集約し、一大豚生産地にしていくなどしていったり、「きゅうり」をこれから力を入れていきたいとするならば、それを全国に発信し全国のきゅうり農家を招き入れるようにしていったらどうか。全国からその農産物に長けた人を桐生市に集める取組も有用かなと思う。
17	小学校や中学校では「桐生織物」について、また「桐生市の農産物」について学ぶ機会をふんだんに設け、桐生市で育った若い世代の子供達が将来「桐生で働きたい」と思うような魅力の発信をし続けていく事がとても必要に感じる。
18	桐生商店街にシャッターが閉まっているお店が無くなったら、各店舗の店員の人材が必要になってくる。シフト制などで運営していけば、雇用の創出も見込める。特に「桐生市人口ビジョン原案後編」54 ページにあるように、子育て中の女性は「短時間労働」を希望している人が多いようだが、シフト制にする事により、短時間労働勤務も実現する。 「桐生織ポータルサイト」と「農業ポータルサイト」は、運営し続けていく事こそが必要である。まめな更新、問い合わせに対する返答といった事が頻繁に必要なになるので、サイト運営に携わる人が必要になってくる。インターネットなので在宅勤務が可能かもしれない。「桐生市人口ビジョン原案後編」54 ページには「在宅勤務希望」の子育て中の女性も多いとあるので、もしかかもしれないが、雇用創出になりえると考え。在宅勤務については、特に「桐生織の楽楽天店」が実現すれば、ネットショップとして在庫の管理、桐生織商品の梱包、発送、電話受け、受注管理といった仕事も必要になるのでこれも雇用創出につながる。

(3) (仮称) 桐生市まち・ひと・しごと創生総合戦略「目標 2」についての意見

番号	意見の要旨
19	地方創生（人口減少対策）への戦略 一言でいえば「街の魅力を創り出す」ことである。桐生という町（街）に魅力があれば、自ずと人は定着し、またこの街に多くの人が訪れる。その町の持つ魅力とは、「見たい、食べたい、持ちたい（買いたい、着けたい、泊まりたい）」の3つのいずれかの有無や大小である。 人口には定住人口と仕事や観光などで訪れる流動（往来）人口の2つがある。桐生という山間の街には、工場誘致は大きな限界がある。従って、工場誘致を考えて人口増加を図るという構想は最初から破綻する。 人が心地よく住み、そして他から魅力発見に訪れる、そんな桐生市を創ることこそやるべき仕事である。つまりは、他所には、桐生独自の文化を日本文化の代表的文化の1つとして大いに発信する施策を実行することである。
20	風光明媚への取り組み（働くのは市外でも、桐生に住んでもらうための住環境整備） 桐生には、岡公園（他に例のない公園）、吾妻山（格好のハイキング提供）、梅田（清流と太古の地層）、新里（昆虫の森その他）、黒保根（自然、キャンプやハイク）など自然を素材とした正に風光明媚を訴える岩石（宝の素）がある。これを真の宝＝玉（ぎょく）にする。町も震災を受けていない古い街並みがあるのは、1つの強みである。点在する景勝地、風致地区を如何にして線にするかである。つまりコースとして導線を形成するのである。これを玉にし、多くの人に訪れてもらうための施策、方法の構築である。
21	風光明媚への取り組み（働くのは市外でも、桐生に住んでもらうための住環境整備） 「桐生八木節祭り」について多くの見物客が押し寄せるものにするにはどうしたら良いか。今のままで良いならそれも良いが、もっと大きくし、ひいては桐生の知名度アップにつながるものにするには、もっと知恵を出す必要がある。子供みこしの見直しと祭りでの活用（みこしが練り歩き、一斉に町の中央部に集結などの企画）、山鉦巡行と合体、そして盛り上がったところで大八木節踊りの開幕、もちろん花火は欠かせない。「踊るあほう」と「見るあほう（見せる祭り）」とを上手く結合させた企画が必要である。各地の祭り、イベントは、如何にしてあのような盛り上がるものになったかを検証し、現在の八木節祭りの参照とする必要がある。なお、桐生市とみどり市との合併協議問題とは別に、両市の観光資源を共同開発するプロジェクトも必要である。 先日、桐生の町おこしの一環で、群大生数名に着物姿で街を歩いてもらい、若者目線で云々という記事が桐生タイムスに掲載されていた。イベントは、時期、内容、期待する効果、結果の公表を考えてやってもらいたい。やるからには、コストパフォーマンスを真っ先に考えて企画、実行してもらいたい。
22	東京圏で移住をしたいと思っている人が40%ぐらいいることから、「東京圏の人たちに、桐生市が移住先として最大限に魅力的なまち」だという事をアピールする事だと思う。東京圏の人は「魅力的なものに惹かれる」傾向がある。 まず、桐生市の景観整備が先決だと思う。特に東京都の景観条例はとても厳しく、都民にも景観についての意識が浸透しつつあるようである。桐生市もまず景観、特に色彩を整える事で魅力的な市に変える事が必要である。

23	「人生の楽園」というテレビ番組があるが、この番組で桐生市の事がもっと頻繁に取り上げられるようになれば、特にシニア層の移住を呼び込む事が出来そうである。シニア層は、インターネットよりもテレビの方に親しんでいるようだから、もし桐生市が魅力的になった上にブランド化されて、テレビへの露出が増えれば移住したいと思う人が全国で増えていくのではないかな。
24	若い世代にはインターネットが有効だから、「魅力的な」、「桐生市ポータルサイト」を格好良く、ウェブデザイナーに作ってもらって、「桐生市に移住する方法」を分かりやすく知らせるホームページを作って、そこを窓口として運営していくと良いのではないかな。 その「桐生市ポータルサイト」は「空き家バンク」とも繋がっていて、「桐生市ポータルサイト」に行けば、簡単に空き家や土地を紹介してもらえれば、ますます魅力的だと思う。
25	新里地区は「農業振興地区」だから、農園として一般のお客さんも気軽に見に来られて収穫体験も出来るような「観光農園」にしていくことも有効ではないかな。もし新里地区が「観光農園」としてブランド化されれば、その近くに「オーベルジュ」などを作って、新里で採れた野菜や肉で料理を作ってもてなす宿を運営して集客につなげていけるかもしれない。しかしまず、何より新里地区においても徹底した景観の整備、調和が必要である。

(4) (仮称) 桐生市まち・ひと・しごと創生総合戦略「目標 3」についての意見

番号	意見の要旨
26	教育環境への取り組み 桐生には、高校がたくさんある。県立高校が多いということは、流動的とはいえ、若者人口の確保になっている。そのためにも「勉強に最適の町」にする。群馬県は、今や1県1学区制になり、前橋（前高、前女）への一極集中が加速している。前橋や太田の高校ではなく、桐生高校はじめ桐生の高校へ進学しよう！といった改革が必要である。高校自ら「学びやすい環境」への変革、整備を学校関係者に求めなければならない。 桐生市立商業校の改変。太田市立商業高同様に市立桐生高校とするか、伊勢崎にある6年制の四つ葉中等教育学校のようにするかである。商業科あるいはそれに類するコースは存続しても、他に時代を先取りするコースあるいは、徹底した特化コース（例えばスポーツ健康科学コース、医療看護コース、医療事務コース、情報デザインコース等々）を設ける。そして、超進学コース（30～40人）、桐生の強みの野球、バドミントン、卓球、バスケットボール、バレーボールなどを強化育成する。スポーツコースは体育大や体育学科への進学ルートを確立する。6年制にするなら、四つ葉や県立中央中等などとは一味違って、しかし価値のある（行きたくなる、行かせたくなる）学校に大改革する。市立であればこそ、桐生市もかなりイニシャチブが取れるのではないかなと思う。
27	教育環境への取り組み 館林には、多々良沼周辺の環境整備とすぐそばに県立美術館がある。誰もが一度は行ってみたい場所になっている。今夏、家族で富岡の県立自然史博物館を訪ねた。展示内容も立派であったが、周辺環境も実に見事であった。県内にとどまらず他県からも是非行ってみたいと言われる県立の文化施設を設けることである。

28	教育環境への取り組み 桐生には、国立の群馬大学理工学部がある。桐生市、群大、企業が「産官学共同の地域活性化対策協議」を設け、桐生市の活性化事業を推進している。しかし、これも掛け声倒れのそしりをまぬかれない。群大に働きかけ、もっと国内外からのカンファレンスや学会を招致し、桐生に人が来てもらえる環境を作る必要がある。それには、ナンバーワンでなくオンリーワンのユニークな寄付講座を市が設け、桐生のしかも群大理工学部でしかできない、それでいて価値の高い世界的研究業績を上げてもらう。そうなれば、世界から研究者や若者が来る。短期研究滞在も含め、流動（往来）的人口は増え、これが常態化すれば、宿泊や接待業務も増える。 今、国立大学も独立法人化し、競争の時代である。そうでなくても、日本は大学にランク（入学難易度、研究力、研究予算額、就職率その他）を付ける風潮にある。群大と桐生市が正に一体となり、「世界に冠たる群大理工学部」を創生しなければならない。
29	教育環境への取り組み 昨年、「関東高校少林寺拳法選抜大会」を、みどり市の桐生大学体育館で開催した。この大会の会場条件は、①会議室が数室確保可能、②サブアリーナを有する（本番前の練習、召集・点呼の場所）である。桐生には、この条件を備えた体育館は無い。もちろん、市立武道館も無い。私たちは、毎月一回、渋川市武道館で県内の有段者有志による研究会を行っている。同施設は、相撲以外の武道が修練できるだけなく、立派なトレーニング室も備えている。このように、体育や健康サポート面からも桐生市は大きく遅れている。これでは、「教育の町」にするには、道遠しである。一日も早い建設（または市民体育館の改修）を望む。
30	桐生市が魅力ある街となるためには、教育の機会均等の実現が最も重要だと考える。子供の教育を地域で支える取り組み、例えば、親の経済状態で塾に通えない子をボランティアの先生が教えるような仕組みを提案したい。これは、元教員や大学の先生と共に、企業で活躍した高齢者の生きがいともなり、市の活性化に繋がると考える。
31	働く若者への高等教育のチャンスを与える定時制大学の復活を提案したい。これは群馬大学理工学部が太田キャンパスで実施し、勤労青年へ高等教育を受ける機会を与える取組として、国の高い評価を受けたにも拘わらず、大学の事情で継続できなかった。桐生市が応援して、定時制大学の復活を実現することを提案したい。
32	学校を共学に全て変える事だと思う。桐高も桐女もどこも、全て共学にしていくべきだと思う。学校を共学にしない時点で、すでに異性との出逢いを市は「阻んで」いる。私個人は共学で育ったが、異性と接し続けると、逆にあまり異性を良い意味で意識しなくなる。異性に対して必要以上に意識しなくて済む。そして、異性を一人の人間として、よく観察できるようになるので、青少年の育成的には早くに共学にした方が良いと思う。群馬県に先駆けて桐生市で共学化していくべきだと思う。
33	お金がなくて結婚できないという人も多いことから、桐生市は桐生市条例で、「最低賃金」を全国平均よりも高く設けるようにしたらどうか。私は常々、一つの仕事をフルタイムでしているのに、家族を養える分賃金がもらえないという、特に「バイト」というシステムはおかしいと考える。バイトや非正規雇用を3年続けたら必ず正規雇用にすると、桐生市では条例化して欲しいぐらいである。

(5) (仮称) 桐生市まち・ひと・しごと創生総合戦略「目標 4」についての意見

番号	意見の要旨
34	風光明媚への取り組み（働くのは市外でも、桐生に住んでもらうための住環境整備） 先ず玄関となる駅の活性化（再構築）である。これには、JR 東日本や東武鉄道など他者の協力が必要である。駅及びその周辺の再開発である。また、岩石から玉に再生可能な地域の再開発である。東武伊勢崎線の中で、新桐生駅は最もバリアフリーが遅れており、実に貧相である。
35	医療、衛生環境への取り組み 少子高齢化が叫ばれて久しい。先進 7ヶ国では、唯一出生率が上がっているのはフランスだけである。その第一の理由は、「産み易い」である。医療、福祉の両面が生活者に優しいのである。 高度先進医療の充実を実現し、「頼もしい桐生の医療」としたい。厚生病院は、もっともっと市民に開かれ、行きやすく安心して任せられる医療施設でなければならない。厚生病院を最後の拠り所とするのではなく、逆に厚生病院から通院者に「あなたの居住地からは○医院の△医師が良いから、そちらで治療を」と提案があっても良い。福祉予算に医療補助を濃密にし、住民に優しい行政が求められる。
36	まち・ひと・しごと創生会議が議論を進める主な施策の中に地方でも関心が持てる議論に日本版 C C R C (Continuing Care Retirement Community)、地方居住の推進がある。桐生市では今後、後期高齢者が益々増えることであり「継続的なケア付リタイアメント・コミュニティ」のコンセプトをまち・ひと・しごと創生の計画に加えることが必要である。
37	人口減少や若年層の減少を食い止めるための施策と共に、そういった状態になることを前提としてどう対応するか両面から考えて行くことが必要である。 桐生市は現在の人口でも政府のいう地方中核都市の条件である 20 万人を満たしておらず、桐生市単独で考えるのでは無く、近隣の市町村と連携した都市づくりを目指す必要がある。
38	桐生市は、単独では残念ながら特例市にもなり得ないのが現実である。このことを冷静に考えた時、桐生市は仮に太田市と合併したとしても、産業活動を担うよりも群馬大学を中心とした教育や研究機関の集積地、自然環境や古い街並みを活かした観光地やベッドタウン、絹織物を中心としたファッションタウン、などを目指す必要を感じる。 一方、東京一極集中は自然災害の面から考えると、核の機能が停止するリスクを抱えていると言ってよい。桐生市は自然災害に強く、赤城南面を政府機関の受け皿としての可能性を検討してみる価値はあると思う。
39	普通の仕事の対価とは別の、一定の仕事に対しボランティアポイントが貰えるというシステムを提案したい。 ポイント交換は、遊園地の乗り物券であったり、そこは知恵の出し方次第で励みになると思う。このボランティア登録制は、市内（街中、駅前、公園、病院）の花作戦にも活かせます。全国各地には"花いっぱいのもちづくり"を市民活動で行い、それに伴ったイベントも自然と広がりが出るので、結果として地域の活性化が見られる様である。
40	水道山公園、吾妻公園、桐生が岡動物園、遊園地を広がりを持って整備し、人の動線が見えるような一体化した、運動（健康）、安らぎ（癒し）空間の構築。1 年中途切れないイベントで、観光客の取り込み。そして、市民が行きたくなくなる憩いの場所。

41	旧西中跡地を利用した“まちなかふるさとセンター” 遊園地、動物園、重伝建への来訪者を、地場産の売店、市街展望出来る B 級グルメフロア、和紙等手作り休憩コーナー、また、校庭の周りに健康遊歩道(足裏刺激道)を作り、市内外の年配者にもやさしい運動コーナー。
42	長期的なビジョンとして、桐生市を「3 つのコンパクトなまち」に集約していくように、方向付けしてはどうかと考える。 ①桐生商店街 桐生の商店街や重伝建などのこれから観光地化されていくであろう地区。ここに商店という商店を集約、また、介護が必要な高齢者、そして介護施設もこの地区に集約させていく。 ②工業地区 織物産業などの工業地区。そしてその産業に携わる人の居住地を集約させる。 ③新里・黒保根農業地区 この 2 地区のどこかに、全ての人が自家用車を使えるという前提で農業に携わる人の居住地となる住宅地を集約させる。 もちろん、②と③にも生活必需品を購入できる店は点在させる。桐生市に住む人の居住地をまとめれば、インフラ整備をあまり広い範囲で行わなくても済むようになる。 桐生市は「買物などが便利」と言う人がたくさんいた一方、「買物などの日常生活が不便」と言う人もたくさんいた。それは「買い物弱者」と言われる高齢者なのではないかと感じます。3 つの居住地に集約したら、その中で、特にバス路線を充実させる。もっと首都圏のように頻繁にバスを走らせるように（1 時間に最低 3 本）したらどうかと思う。